

岩 木 ウ メ さ ん (大正6年生)



私どもの開拓といいますが、皆さんと特別変わったことはありません。若干おくれて現地に入りましたので、部落の人々には随分とお世話になりました。現在でも思い出すのは、収穫期の忙しさです、朝に星を見て起き、夕べには星を背にして帰るのが日常ですから。落しもの時は、カラ竿振っている背中に霜が降りて、シットリするし、積んでいる豆の上が白くなっているのです。精も根もつきるとはあのような状態をいうのかもかもしれませんね。そのようなありさまですから、子供の中でも上の者は学校を休まされるわけですが、これが70日~90日(年間)になるのですから、本当にかわいそうなことをしたと今でも思いますが、どうしようもなかったのです。現在でもあの時のことが心の重荷になっているのです。

私の家のほんの近くに、溝程の小川が流れていましてね。夏の終わり頃に必ず鱒が上ってくるのです。子供たちがおもしろがつて追いかけては素手でつかまえるのです。どうしてあんな小川に鱒など上ってきたのでしょうかね。二~三本は捕れたようです。冬、吹雪の強い夜など、寒さのため眠れず馬はどうしているかなあと思い、見にゆくと、背中一杯雪を乗せ、眉毛まで白くして目ばかりパチパチさせていたのが印象的でした。馬という動物はかわいいものですね。

私の実家は野田と言います。実家では大正の中頃から昭和の10年代まで、養蚕をやっておりまして、子供の私達まで朝夕の桑の葉摘みをしました。これが、なかなかの重労働なのです。太陽の昇る前に葉を採らなければならず、朝起きの眠いのなんのって大変なのです。蚕は、まゆを作る前の時期には実によく食べるものなのです。20畳の部屋に三段に置かれた蚕棚の葉の食べる様は、まるで小雨でも降るような音がするのです。サワサワとそれはそれは大変な勢いなものです。ある時役場から指示がありまして現在の天皇陛下の御成婚式に使用する、絹布を織るようにとのことでした。当時のことですから、名誉であると引き受けたのですが、実はこの準備が大仕事なのです。家の中はあちらこちら新しくするし、作業場になる奥の6畳にしめ縄を張り、新しいたらいに水を満たして置き、織手以外は入室厳禁、母が織ったのですが、母は毎朝タライの水で身を清め作業するのです。又、当人は勿論ですが、家族全員、予防薬飲むのです。白い葉でしたが、これが苦いのです。毎日飲まされるのには困りました、結局着物一枚分を相当の長い日数かけて作ったのです。

全国から何名か選ばれて、織らされたとのことですが、わが家の養蚕事業はその後もしばらく続きましたが、種々の条件が合わず、結局は失敗でした。

